

中国留学

国際文化学科 2年 林真由

1. なぜ留学を決意したか

私は、8月30日から1月8日までの約4カ月、中国の北京師範大学に留学してきました。1年生の時から「留学」というワードを耳にする機会は何度もあったように思いますが、その時は、留学にはもちろん費用がかかるし、海外への旅行すらしたことがないのにいきなり留学だなんてとんでもない、と留学をする気は全くありませんでした。そんな私が留学へ行ってみようと思うようになったのは、講義で学んだ中国の歴史や文化から受けたイメージと、日本のマスコミが報道する中国のイメージの差異に違和感を覚えたことがきっかけです。これを言うと笑われるかもしれないのですが、1年次後期の言語選択で私が中国語を選んだ理由は「漢字が好きだから」という単純なもので、漢字を中心にして外国語が学べるなんていいじゃないか、と今思えば安易な考え方をしていたと思います。その頃の私の中国へのイメージは、日本のマスコミが報道していることをそのまま鵜呑みにしたひどいもので、それでも、中国へのイメージがどんなものであれ留学になんて行くわけがないし、自分には関係のないことだと思っていました。しかし、中国の歴史・文化に関する講義や先生方の話を聞くにつれて中国へのイメージが変わっていき、日本のマスコミの偏った報道の仕方と、偏りのある報道を鵜呑みにして中国を毛嫌いし排斥しようとする、以前の自分のような考え方に不快感を覚えるようになっていきました。中国人は本当に日本人のことを嫌っているのか。毎日のように反日デモを行っているのか。いっそのこと、それらが真実でも構わないとすら思っていました。自分の目で見て、耳で聞いて、体験して、納得するために、私は留学を決意しました。

2. 留学生活

いよいよ日本を発つといったときに航空機の出発が2時間遅れ、出鼻をくじかれた思いと幸先の悪さに不安でいっぱいでしたが、やっとの思いで北京の空港に到着したときはもう真夜中で、人もおらず外の景色も見えず、日本ではない国にいるという実感は湧きませんでした。次の日になって、大学の中や外を見て回り、日本とは比べ物にならないくらいの道路交通量を目の当たりにした時や周囲の人の話していることがさっぱり分からないと感じた時、ようやく外国に来たのだなと実感しました。スーパーで菓子パンを一つ買うのに長い時間悩んだり、食堂での人の多さに怯んだり、留学が始まったばかりの頃は満足に食事も出来ず、三食パンを食べた日もありました。このまま毎食パンを食べる生活が続いたらどうしよう、と本気で悩んだこともありましたが、日々を過ごしているうちにお金の使い方が分かってきたり、メニューの読み方を辞書で調べて、いろいろ注文出来るようになったりと、毎食パン生活の不安からは抜け出すことができました。日本にいたらこんな面倒なことをする必要はないのに、と思ったのと同時に、苦労ばかりの手探りの生活がなんだか面白く思えてきて、日本にいたらこんな思いにはなれないだろうな、と変に前向きな考え方をしていたような覚えがあります。今思えば、精神的疲労が溜まってハイになっていただけかもしれませんが、自分のこの楽観的な考え方のお陰で、一度もホームシックに罹ることなく留学を終えられたのではないかと思います。

北京に到着して数日後、留学生に授業のためのクラス分けテストが実施されました。テストは筆記試験と簡単な会話の口述試験の二つでしたが、そのどちらのテストも惨憺たる結果であったと言わざるを得ませんでした。何が書かれているのか読めない。何を訊かれているのかわからない。あまりにひどい結果に同級生たちと肩を落としましたが、それも一時のことでした。済んだことで落ち込んでいても仕方がない。今わからないなら、これからわかるようになればいいのだと。

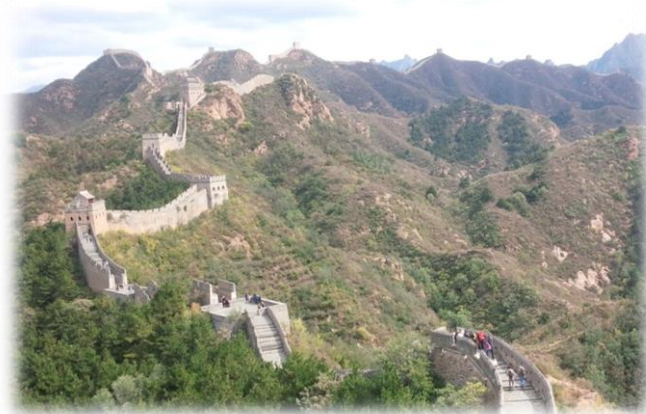
授業はほぼ中国語で行われ、漢字の成り立ちなどはところどころ英語で説明されました。授業が始まってすぐの頃は、私たちは先生が何を話しているのか聞き取れないでいるのに、他のクラスメイトたちはすらすら返答しているのを見て、いたたまれない気分になったり、英語の理解すらおぼつかない状態に不安を抱えたりしていました。それでも、話していることがほとんど理解できなくても、わかる部分だけでもと意味を調べ続け、課題をこなし続けていたら、1か月ほどで先生が何を言っているのかなんとなく理解できていることに気がきました。この時は本当に嬉しくて、もっと頑張ろうと思い再び気を引き締めることができました。授業の回数を重ねるごとにどんどん先生の話すことが理解できるようになり、クラスメイトと一緒に笑ったり、先生やクラスメイトと会話が出来たりと確実に上達を感じられて、苦労ばかりだった生活が変化していくように感じられました。

私のクラスには韓国やフランス、デンマーク、アメリカ、コスタリカなど様々な国から来た留学生がいて、日本とは異なる歴史、文化、思想の中で生きてきた彼らと同じ教室で授業を受ける間に、気付いたことが二つありました。一つ目は、海外からの日本の注目度です。クラスメイトの韓国人やタイ人は、日本に興味があり、少しだけなら日本語も勉強したことがあると言って、ありがとうございます、おやすみなさいなどの挨拶をしてくれました。その時は日本に興味を持ってあげることが純粹に嬉しくて、同級生と一緒にすごいすごいと絶賛しましたが、対する私たち日本人は韓国やタイの挨拶はおろか、数の数え方すら知らなくて、なんだか申し訳ない気持ちになってしまいました。ある時には、同級生と日本語を話しながらキャンパス内を歩いていると、しばしば中国人学生に「日本に興味があるから日本人の君たちと友人になりたい」とか「日本語を勉強しているから、先生をしてほしい」と話しかけられることがあり、海外からの日本の注目度に驚かされました。

二つ目は、授業を受ける姿勢です。日本の教育は小学校であっても大学であっても、先生が一方的に説明をし、生徒はそれをノートに書き取るだけで、授業中に生徒が先生に質問をするなんてことはほぼないと言っても過言ではない、受け身の授業形態が多かったように感じます。私の日本での学校生活も、例に漏れず受け身の姿勢でした。しかし彼らは、わからないと思ったことや少し引っかかった程度のことで迷わず先生に質問していたように思います。課題の答え合わせの時も、私は間違えるのが恥ずかしくて当てられても声が小さくなりがちでしたが、クラスメイトたちは堂々と答え、たとえそれが問題の答えとして正しくなかったとしても、先生は私たちが分かりやすいように解説をしてくれました。その姿を見て、恥ずかしいのは間違えることではなくて、間違えたままであることかもしれないと思いました。もしその時の自分の答えが間違っていたとしても、まだ学んでいる途中なのだから間違えるのは当たり前で、全然恥ずかしくないと感じることは、今後も中国語を学ぶにあたり大切な意識の一つであると思いました。

中国には世界遺産や多くの観光名所があり、休みの日には友人を誘って色々なところを観光して

回りました。中国の観光地はどれも1日では回り切れないほど広く、見ごたえがありました。西太后で有名な頤和園では、果ての見えない大きな湖と豪華な建築物、高台の上から望む広大な景色と



観光客の多さに圧倒されました。広い園内を歩き回り、帰る時間になった頃には、脚が棒のようになってしまいました。北京動物園ではジャイアントパンダやシロクマ、キリンの愛らしさに癒され、良い息抜きが出来たと思います。訪れた中で私が一番気に入った場所は、万里の長城です。万里の長城を訪れたその日は、少し風が強くて肌寒いと感じましたが天気はとても良く、360度どこを向いても気持ちの良い自然が広がっていました。万里の長城は想像していた

よりもずっと長く、遙か遠くの山の方まで続いていることに驚き、同時に昔の人々はどのようにしてこんなものを作ったのだろうと疑問に思いました。万里の長城は、世界遺産に登録されていることに納得できる、素晴らしい場所でした。機会があれば、是非また訪れてみたいと今でも思っています。

留学が始まったばかりの頃は4か月という留学期間を非常に長く感じていましたが、終えてみると本当にあっという間の4か月でした。やはり、日本のマスコミが報道する中国と実際の中国は違っていました。バスや地下鉄に乗ると、老人や妊婦、子ども連れに席を譲る中国人を必ず目にします。路上で道を尋ねれば、快く教えてくれます。困っていることに気付くと声をかけてくれます。大学では日本のドラマやアニメ、俳優やアイドルが好きだと言ってくれる中国人大学生にたくさん出会いました。マスコミが報道する中国の姿は事実なのかもしれませ



ん。しかしそれは一面にすぎず、それが中国のすべてであるかのように錯覚し敬遠することは中国のためにも日本のためにもならないと確信を持って言うことができます。

中国での生活の中で多くの学びと気づきを得ることが出来、それらは日本には知ることは出来なかったと思います。中国での生活は、楽しい事や楽なことばかりではなく、どちらかといえば、「どうして自分がこんな目に」とか「損をしてしまったな」とか、面倒だとか不安だと思ふことの方が多かったような気がします。しかし、心配も不安も無く、新鮮さも変化もない平和な日本で毎日を過ごすよりも、心が上がったり下がったりする刺激的で忙しい北京での日々の方が、私にとっては愉快で価値のある日々を感じられました。

最後に、今回の留学でお世話になった



先生方、中国で出会った人々、ともに4か月を過ごした同級生たち、支えてくれた家族に感謝の意を述べたいと思います。私がこの上なく有意義な4か月を過ごせたのは、皆さんのお力のお陰です。本当にありがとうございました。